

銘柄	基準価格	落札価格	前年比	上場数量	申込数量	落札数量	落札率	申込倍率
きたほなみ	45,065円	46,200円	102.0%	71,180t	121,020t	71,180t	100%	1.70倍
ゆめちから	46,354円	43,246円	92.8%	8,680t	2,560t	2,560t	29%	0.29倍
春よ恋	55,605円	50,111円	89.7%	6,030t	1,590t	1,590t	26%	0.26倍
キタノカオリ	56,732円	51,407円	90.2%	1,400t	790t	790t	56%	0.56倍
はるきらり	47,187円	42,499円	89.6%	790t	580t	580t	73%	0.73倍

パン用小麦は国産の自給率が3%程度しかなく、普及が課題となっている。今年産では、近年登場した秋まきの新品種ゆめちからの他、栽培が難しいがパン店から人気のある「キタノカオリ」、春まきの「春よ恋」「はるきらり」の4銘柄が上場された。

ゆめちからは価格の高さが課題となり、昨年第1回の申し込みでは1%しか落札されなかった。今年産は昨年の不振を受け、基準価格が前年の約半分の4万6354円となったが、上場量8680ト(前年比7%減)に対し、申し込み・落札量は上場量の30%に当たる2560トにとどまった。

その他の強力系の申し込み倍率も0.3~0.7倍で、いずれも落札残が発生する厳しい出だし。26日に予定されている第2回入札の結果が注目される。

ホクレンは「第2回の結果を見ても分らない部分が多い。硬質(強力)系小麦については、劇的に需給ギャップが改善されているとは言えないので、まだまだ対策をしていく必要がある」(麦類課)としている。

<国産小麦の入札>

収穫の前年に、生産者と、製粉業者など実需者の間で取引数量・価格について契約(播種=はしゆ=前契約)を締結し、これに基づく取引が行われている。販売予定数量の3割で入札を行い、残り7割は入札で形成された指標価格を基本とする相対取引となる。入札は秋に2回行う。

農業ガイド977号

2014年9月27日

需給ギャップ解消傾向 需要増や販促などで 15年産道産小麦

	販売予定	購入希望	需給ギャップ
日本麺用 前年比	47万9408トン -5.1%	45万6752トン +10.8%	2万2656トン -75.6%
パン・中華麺用 前年比	11万6687トン +6.1%	5万7039トン +66.1%	5万9648トン -26.9%
合計 前年比	59万6095トン -4.0%	51万3791トン +15.0%	8万2304トン -52.8%

道農協畑作・青果対策本部は16日の本部委員会で、2015年産道産小麦について、供給が需要を上回る「需給ギャップ」は解消傾向にあることを示した。購入希望が増え、14年産より9万ト程度ギャップが縮まったとした。

同委員会で8月に開いた製粉業者など実需者と生産者との北海道民間流通地方連絡協議会での内容をホクレンが報告した。道産小麦をめぐる需給状況は、近年の天候不順による作柄の変動や輸入小麦の使いやすさなどから需給ギャップが広がる傾向にあった。

15年産の生産者側の販売予定数量は59万6095ト、購入希望数量は51万3791トで、販売希望から購入希望を引い

た需給ギャップは8万2304トだった。14年産の需給ギャップは17万4318トだったことから、9万2014ト縮小したことになる。

用途別にみると、十勝でも主力の中力系「きたほなみ」など全体の8割を占める日本麺(うどん)用は前年に比べ、販売希望が5.1%減ったのに対し、購入希望が10.8%増えた。需給ギャップは販売希望の4.7%に当たる2万2656ト。

近年作付けが増えていた「ゆめちから」などパン・中華麺用の強力系小麦は、販売予定はほぼ前年と同じで維持され、購入希望が66.1%と大幅に増えた。ただ、需給ギャップは販売希望の半分以上と依然大きい。

需給ギャップの縮小は、実需者側の在庫過多が解消されてきていることや、生産者側の販売促進努力、パン・中華麺用の価格下落などが要因とみられる。

生産者側は、さらなる受給ギャップの解消を図るため、16年産については今冬にも実需者との意見交換を行い、早期に需要を聞いて対策を講じる予定だ。